

【審査論文】

都市部に在住する高齢者のプロダクティブな活動と well-being の関連

— 千葉県市川市の調査から —

岡本秀明

Productive activities and well-being among the elderly in an urban area:**- Findings from a survey in Ichikawa City, Chiba Prefecture -**

Hideaki OKAMOTO

要旨

本研究では、高齢者のプロダクティブな活動 (productive activities) と well-being の関連を明らかにすることを目的とした。千葉県市川市の高齢者 1,400 人を対象に、自記式調査票を用いた郵送調査を実施したところ、有効回答数 (率) は 755 人 (53.9%) であった。プロダクティブな活動は、有償労働、家庭内無償労働、家庭外無償労働というプロダクティブな活動 3 領域 (3 変数) と、プロダクティブな役割数 (1 変数) により測定した。Well-being の指標には、生活満足度、日頃の活動満足度、主観的健康感の 3 変数を用いた。プロダクティブな活動 3 領域とプロダクティブな役割数の計 4 変数から変数をひとつずつ独立変数に投入し、基本的属性等と社会的側面の変数をコントロール変数、well-being 指標の 3 変数それぞれを従属変数にして、多変量解析 (重回帰分析または二項ロジスティック回帰分析) を男女別に行った。分析の結果、男性の家庭内無償労働と女性の有償労働が生活満足度に、女性の家庭外無償労働が日頃の活動満足度に、男性の家庭内無償労働と女性の有償労働が主観的健康感に、女性のプロダクティブな役割数が日頃の活動満足度と主観的健康感に、有意な正の関連を示した。今後、他の地域の高齢者を対象に追試を行い、本研究と同じような結果が得られるのかどうかを検討していくことが求められる。

キーワード：プロダクティブ・エイジング (productive aging)、プロダクティブ・アクティビティ (productive activities)、ウェルビーイング (well-being)、高齢者 (community-dwelling elderly)

I. はじめに

わが国では、人口高齢化が急速に進行している。それに伴い、要介護高齢者や認知症高齢者の一層の増加が見込まれ、さまざまな対策を進めていかなければならない状況にある。その一方で、介護を必要としない高齢者も増加している。65 歳以上人口のなかで要介護・要支援と認定された者の割合が約 16% であることから、高齢者の約 84% は介護サービスを必要としない元気な者である¹⁾との指摘もみられる。

介護や社会的コストを要するなどの依存性ばかりに着目するような高齢者に対する偏った見方を払拭するため、プロダクティブ・エイジング (productive aging) という概念が提唱された²⁾。高齢者が有する生産性 (productivity) に着目し、これが社会でもっと活用されるようにするべきだという、生産性の観

点から高齢者をポジティブにとらえなおしたこの概念は²⁾、大きな関心を集めるようになった。

プロダクティブ・エイジングをとらえる指標として、プロダクティブな活動 (productive activities) がある。プロダクティブな活動には、有償労働 (paid work) とともに無償労働 (unpaid work) が含まれる³⁾。高齢者が行う無償労働に着目すると、高齢者の生産性は、年齢が上昇しても安定的もしくはゆるやかな低下にとどまることがわかる⁴⁾⁵⁾⁶⁾。しかし、有償労働のみに着目してしまうと、定年退職などにより、高齢者の生産性が年齢の上昇とともに急激に低下することが示されるため、高齢者はプロダクティブな存在ではないという偏った見方に陥ってしまう⁴⁾。よって、プロダクティブ・エイジングおよびプロダクティブな活動の視座において、無償労働を含んでいるということが重要となっている。

プロダクティブな活動の概念定義について、Herzogらは、有償であろうとなかろうとモノやサービスをうみだす活動で、家事、子どもの世話、ボランティア、家族や友人への支援のような活動を含む⁴⁾としている。有償労働やボランティアを行う能力を高めるために行う訓練などについては、プロダクティブな活動に含むとする定義⁷⁾、含まないで区別すべきだとする定義⁸⁾がある。

高齢者のプロダクティブな活動への関与は、その本人のwell-beingを高めるのであろうか。Well-beingとは、心理的あるいは身体的に良好な状態を指し、日常生活動作の自立の程度や病気の有無などの客観的に測定可能なものや生活満足度などの主観的なwell-beingが含まれる⁹⁾。今日的なサクセスフル・エイジング (幸福な老い) の概念には、主観的なwell-beingが含まれるとされている¹⁰⁾。RoweとKahnが提唱したサクセスフル・エイジングの概念は、3つの要素から構成されており、そのうちの1つの要素である生活への積極的なかかわり (active engagement with life) には、社会関係とともにプロダクティブな活動が含まれている¹¹⁾。

高齢者のプロダクティブな活動とwell-beingの関連を多変量解析により検討した実証的な研究は、それほど多くない。Well-beingの指標に肯定的感情 (positive affect) と否定的な感情 (negative affect) を用いて、男女別の検討も含めて行った研究によると、有償労働および宗教的な組織等における無償労働と肯定的感情および否定的感情との間には男女ともに関連がない、男性については宗教的ではない組織等における無償労働と肯定的感情との間に正の関連がある、女性については家庭外でのインフォーマルな無償労働と肯定的感情との間に正の関連および否定的感情との間に負の関連があるとしている¹²⁾。

多変量解析の際に、基本的属性等に加え、社会関係や組織・集団への参加などの社会的側面の変数も統計学的にコントロールしてより厳密に検討した実証的な研究はさらに少なくなるが、Bakerら¹³⁾やHinterlongら¹⁴⁾によるものがみられる。Bakerらは、活動数と活動時間の2つの側面によりプロダクティブな活動を把握して検討し、活動時間は生活満足度および幸福感和正の関連がみられたこと、活動数には関連がみられなかったことを報告している¹³⁾。Hinterlongらは、プロダクティブな活動の有無とプロダクティブな役割数の2つの側面を用いて検討し、双方とも、主観的健康感および生活機能と正の関連がみられたことを報告している¹⁴⁾。

プロダクティブな役割数についても扱ったHinterlongらの研究¹⁴⁾は、多重な役割 (multiple roles) とwell-beingや健康との関連を検討した研究の1つでもある。多重な役割とは、個人が、従業員、親、介護者、ボランティアなどの社会的な役割をいくつか担っていることである¹⁵⁾¹⁶⁾。多重な役割を担うことが健康状態などにどのように影響するのかについて、実証的な研究が行われている¹⁴⁾¹⁶⁾。多重な役割を担う者はwell-beingが高まると考えるrole enhancementの視座¹⁵⁾¹⁶⁾というのがあり、実証的な研究に援用されることもある。Hinterlongらの研究は、役割のなかでもプロダクティブな役割に特化したものといえる。Hinterlongらは、プロダクティブな役割数が抑うつと関連していなかったが、主観的健康感および生活機

能と正の関連を示していたため、role enhancementの視座が部分的に支持される結果になったとしている¹⁴⁾。

高齢者のプロダクティブな活動とwell-beingの関連について、多変量解析により基本的属性等に加えて社会的側面もコントロールし、さらに男女別に検討した研究は、あまりみられない。そのようななか、筆者は、プロダクティブな活動の3領域（有償労働、家庭内無償労働、家庭外無償労働）とプロダクティブな役割数を測定し、大阪市の高齢者を対象にして男女別に検討した研究結果を示している（以下、大阪調査と示す）¹⁷⁾。有償労働は、女性の生活満足度、男性と女性の主観的健康感と正の関連がみられたこと、家庭内無償労働は、男女ともにwell-beingの指標と関連がみられなかったこと、家庭外無償労働は、女性の生活満足度および主観的健康感と正の関連がみられたこと、プロダクティブな役割数は、男性の主観的健康感、女性の生活満足度および主観的健康感と正の関連がみられたことを報告している¹⁷⁾。そして、知見の蓄積のために他地域における追試が必要であると指摘している¹⁷⁾。しかしながら、そのような研究は、まだみられない。

以上のような背景から、本研究では、先行研究の大阪調査とは異なる地域を対象にして、高齢者のプロダクティブな活動とwell-beingの関連を、多変量解析により基本的属性等に加えて社会的側面もコントロールして男女別に分析したうえで、明らかにすることを目的とした。なお、本研究では、日頃の活動満足度¹⁸⁾をwell-beingの指標に新たに追加することにした。その理由は、日頃の活動満足度を測定する日頃の活動満足度尺度¹⁸⁾は2009年に発表されたばかりであり、さまざまな活動との関連を検討して知見を蓄積する必要があるためであった。

II. 研究方法

1. 調査の対象と方法

分析には、65歳以上の者を対象にした社会福祉調査（65歳以上の方の日常の活動と意識の調査）のデータを使用した。このデータの概要は、次のとおりである。千葉縣市川市の高齢者（65～84歳）1,400人を住民基本台帳により無作為抽出し、自記式調査票を用いた郵送調査を実施した。調査期間は、2009年4月15日から5月27日までであった。調査の結果、有効回答数（率）は755人（53.9%）であった。分析対象者数は、このうち、代理回答ではないこと、年齢、性別、家族形態、経済的暮らし向き、IADL、プロダクティブな活動の項目にすべて回答したことを条件としたため、673人となった。

調査の倫理的配慮について、調査対象者の住所氏名等は市川市に調査の趣旨説明をし許可を得て住民基本台帳から無作為抽出したこと、回答データは統計的処理を行い個人を特定しないこと、個人情報厳重に管理していること、調査協力ができない場合には返送せずによりことを調査協力依頼文書に明記した。調査協力が得られる場合には、調査票を無記名で返送するよう依頼した。

2. 調査項目および分析に使用した変数

調査項目および分析に使用した変数は、大阪調査のもの¹⁷⁾を参考にした。

(1) プロダクティブな活動

プロダクティブな活動は、プロダクティブな活動3領域それぞれを活動頻度により把握したものとプロダクティブな役割数の2つのアプローチによりとらえた。

プロダクティブな活動3領域は、有償労働、家庭内無償労働（unpaid work at home）、家庭外無償労働

(unpaid work outside the home)とした。有償労働の領域は、収入のある仕事の1項目とした。有償労働を、例えば、フルタイム、パートタイム、不規則な就労などのように複数に分類する方法も考えられる。しかしながら、本研究では、分析結果を大阪調査の分析結果と比較しやすくするために大阪調査の調査項目と変数を使用すること、高齢者の有償労働(就労)だけに焦点をあてた研究であれば有償労働をさまざまな形態に分類して分析する意義は大きいであろうが、本研究はプロダクティブな活動全体に焦点をあてているために分類が増えると分析や考察が煩雑になること、先行研究¹⁹⁾²⁰⁾においても一括して有償労働として扱っているものが多いことを考慮し、1項目としている。家庭内無償労働の領域は、自宅で行う家事(掃除・洗濯・炊事)、同居家族への世話(看病・介護・孫の世話)の2項目、家庭外無償労働の領域は、別居親族への支援(家事・手伝い・看病・介護・孫や乳幼児の世話)、友人や近隣への支援(家事・手伝い・看病・介護・乳幼児の世話)、ボランティアの3項目とした。この活動3領域および構成項目は、先行研究⁴⁾¹⁹⁾²⁰⁾を参考にして設定されたものである。項目ごとに、「週に3回以上」、「週に1～2回程度」、「月に1～2回程度」、「半年に2～3回程度」、「年に1～2回程度」、「まったくしていない」の6つの選択肢でたずねた。これらの選択肢を年換算回数に変換し(順に260回、78回、18回、5回、1.5回、0回)、活動3領域それぞれにおいて加算した。加算したものは正規分布からはずれており連続変数として使用するの望ましくないため、男女それぞれにおいて三等分し、「高位群」、「中位群」、「低位群」の3群にわけた。2群ではなく3群にわけたのは、データの情報量を減らさないためであった²¹⁾。

プロダクティブな役割数は、プロダクティブな活動の6項目それぞれについて「活動あり」と回答した者を役割があるとみなして1点、「活動なし」を役割がないとみなして0点を付与して加算した¹⁴⁾。役割数についても、男女それぞれにおいて三等分し、「高位群」、「中位群」、「低位群」の3群にわけた。

(2) Well-being

Well-beingの指標には、生活満足度、日頃の活動満足度、主観的健康感の3変数を用いた。生活満足度は、「人生全体についての満足感」「心理的安定」「老いについての評価」の3因子、計9項目により構成され、得点可能範囲が0～9点である生活満足度尺度K (LSIK)²²⁾²³⁾により測定した。日頃の活動満足度は、「楽しめる活動」「やりがいのある活動」「有意義な自由時間」「興味・関心がもてる活動」の4項目により構成され、得点可能範囲が4～20点である日頃の活動満足度尺度¹⁸⁾により測定した。これら2つの満足度は、いずれも得点が高いほどwell-beingが良好であることを示す。主観的健康感は一般的に1項目で測定されるが、回答選択肢をどのようにするかについて、いくつかの代表的な方法がみられる²⁴⁾。本研究では、代表的な方法の1つである、「非常に健康」「まあ健康」「あまり健康でない」「まったく健康でない」の4つの選択肢でたずねた。主観的健康感、単項目であり連続変数として用いて分析するのは望ましくないため、2値変数に変換した。具体的には、「非常に健康」と「まあ健康」の回答を「健康群」=1とし、「あまり健康でない」と「まったく健康でない」の回答を「非健康群」=0とした。

(3) コントロール変数

コントロール変数は、基本的属性等については、年齢、家族形態、経済的暮らし向き、IADL (instrumental activities of daily living; 手段的日常生活動作)とした。家族形態は、「夫婦のみ」を基準(=0)とし、「独居」と「その他」の2つのダミー変数を作成した。経済的暮らし向きは、大変ゆとりあり=5、ややゆとりあり=4、ふつう=3、やや苦しい=2、大変苦しい=1とした。IADLは、日用品の買い物、預貯金の出し入れ、バス・電車の利用の3項目すべてについてできると回答した者を「自立」=1、それ以外の者を「非

自立」=0とした。社会的側面は、親しい友人・仲間数、集団的活動への参加とした。親しい友人・仲間数は、7人以上=4、5～6人=3、3～4人=2、1～2人=1、いない=0とした。集団的活動への参加は、町内会・自治会、高齢者クラブ、趣味の会などの仲間うちの活動の3項目のうち1つ以上に参加している者を「参加あり」=1、それ以外の者を「参加なし」=0とした。

3. 分析方法

プロダクティブな活動の男女間比較は、3群化する前の年換算回数を用いた変数を使用し、Mann-WhitneyのU検定を行った。その他の変数の男女間比較は、連続変数はt検定、離散変数は χ^2 検定を行った。

プロダクティブな活動とwell-beingの関連の検討は、多変量解析により男女別に行った。連続変数である生活満足度、日頃の活動満足度を従属変数とした分析には重回帰分析、2値変数である主観的健康感を従属変数とした分析には二項ロジスティック回帰分析を用いた。独立変数は、プロダクティブな活動3領域とプロダクティブな役割数を1つずつ投入した。コントロール変数は、すべて投入して分析した。

Ⅲ. 研究結果

1. 各変数の分布と男女間比較

分析対象者の特性と男女間比較は、表1に示した。男女間に統計学的に有意な差がみられたのは、家族形態と親しい友人・仲間数であった。家族形態は、男性よりも女性のほうが、独居やその他の割合が高く、夫婦のみの割合が低くなっていた。親しい友人・仲間数は、男性よりも女性のほうが多くなっていた。

表1 分析対象者の特性と男女間比較

	人(%)または平均値±SD		検定
	男性 (n=325)	女性 (n=348)	
年齢			
平均値±SD	71.6±5.0	71.6±4.9	n.s.
家族形態			
独居	34 (10.5)	68 (19.5)	***
夫婦のみ	176 (54.2)	128 (36.8)	
その他	115 (35.4)	152 (43.7)	
経済的な暮らし向き			
平均値±SD	3.0±0.8	3.0±0.8	n.s.
IADL			
自立	308 (94.8)	335 (96.3)	n.s.
非自立	17 (5.2)	13 (3.7)	
親しい友人・仲間数			
平均値±SD	2.2±1.4	2.5±1.2	**
集団的活動への参加			
あり	215 (66.8)	240 (69.8)	n.s.
なし	107 (33.2)	104 (30.2)	

注1：各項目で欠損値がある場合は合計数がnに満たない場合がある。

注2：家族形態、IADL、集団的活動への参加は χ^2 検定、その他の変数はt検定を行った。

***：p<.001, **：p<.01, *：p<.05, n.s.：有意差なし

プロダクティブな活動の分布と男女間比較は、表2に示した。プロダクティブな活動3領域では、すべての活動領域において男女間に有意差がみられた。有償労働の年換算回数は、男性よりも女性のほうが少

なく、家庭内無償労働および家庭外無償労働の年換算回数は、男性よりも女性のほうが多かった。

Well-beingの3つの変数の分布と男女間比較は、表3に示した。男女間に有意差がみられた変数はなかった。

表2 プロダクティブな活動の分布と男女間比較

	男性 (n=325)	女性 (n=348)	検定
有償労働			
中央値 (25, 75パーセンタイル)	0 (0, 260)	0 (0, 1.5)	***
レンジ (年換算回数)	0 ~ 260	0 ~ 260	
家庭内無償労働			
中央値 (25, 75パーセンタイル)	79.5 (18, 260)	260 (260, 520)	***
レンジ (年換算回数)	0 ~ 520	0 ~ 520	
家庭外無償労働			
中央値 (25, 75パーセンタイル)	0 (0, 18)	3 (0, 36)	**
レンジ (年換算回数)	0 ~ 520	0 ~ 525	
プロダクティブな役割数			
中央値 (25, 75パーセンタイル)	2 (1, 3)	2 (1, 3)	n.s.
レンジ (点)	0 ~ 6	0 ~ 6	

注1：Mann-WhitneyのU検定を行った。

***：p<.001, **：p<.01, *：p<.05, n.s.：有意差なし

表3 Well-being各変数の分布と男女間比較

	人 (%) または 平均値±SD		検定
	男性 (n=325)	女性 (n=348)	
生活満足度			
平均値±SD	5.1±2.3	5.1±2.3	n.s.
日頃の活動満足度			
平均値±SD	13.7±4.2	13.7±4.4	n.s.
主観的健康感			
健康群	269(83.5)	278(79.9)	n.s.
非健康群	53(16.5)	70(20.1)	

注1：各項目で欠損値がある場合は合計数がnに満たない場合がある。

注2：主観的健康感は χ^2 検定、その他の変数はt検定を行った。

***：p<.001, **：p<.01, *：p<.05, n.s.：有意差なし

2. プロダクティブな活動とwell-beingの関連

表4に示した3群化したプロダクティブな活動の変数それぞれを独立変数に投入し、多変量解析によりwell-beingとの関連を男女別に検討した。

重回帰分析により、プロダクティブな活動3領域と生活満足度の関連を検討した結果は、表5に示した。男性では、活動3領域のうち家庭内無償労働のみに生活満足度との有意な関連がみられ、基準とした低位群と比較して高位群のほうが生活満足度が高かった。女性では、有償労働のみに有意な関連がみられ、低位群と比較して高位群のほうが生活満足度が高かった。

重回帰分析により、プロダクティブな活動3領域と日頃の活動満足度の関連を検討した結果は、表6に示した。男性では、日頃の活動満足度と有意な関連がみられた活動領域はなかった。女性では、家庭外無償労働のみに有意な関連がみられ、低位群と比較して高位群のほうが日頃の活動満足度が高かった。

二項ロジスティック回帰分析により、プロダクティブな活動3領域と主観的健康感の関連を検討した結果は、表7、表8に示した。男性では、家庭内無償労働のみに主観的健康感との関連がみられ、低位群と

比較して高位群のほうが主観的健康感が良好であった。女性では、有償労働のみに有意な関連がみられ、低位群と比較して高位群のほうが主観的健康感が良好であった。

重回帰分析により、プロダクティブな役割数と生活満足度または日頃の活動満足度の関連を検討した結果は、表9に示した。役割数と生活満足度の関連については、男性と女性の双方において有意な関連はみられなかった。役割数と日頃の活動満足度の関連については、女性のみ有意な関連がみられ、低位群と比較して高位群のほうが日頃の活動満足度が高かった。

二項ロジスティック回帰分析により、プロダクティブな役割数と主観的健康感の関連を検討した結果は、表10に示した。女性においてのみ有意な関連がみられ、役割数の低位群と比較して高位群のほうが主観的健康感が良好であった。

表4 3群化したプロダクティブな活動の分布

	人 (%)	
	男性 (n=325)	女性 (n=348)
有償労働 (レンジ)		
低位群 (0)	184 (56.6)	260 (74.7)
中位群 (男性：5～78；女性：1.5～78)	42 (12.9)	27 (7.8)
高位群 (260)	99 (30.5)	61 (17.5)
家庭内無償労働 (レンジ)		
低位群 (男性：0～36；女性：0～78)	107 (32.9)	21 (6.0)
中位群 (男性：78～156；女性：260)	70 (21.5)	193 (55.5)
高位群 (男性：260～520；女性：261.5～520)	148 (45.5)	134 (38.5)
家庭外無償労働 (レンジ)		
低位群 (0)	166 (51.1)	142 (40.8)
中位群 (1.5～18)	95 (29.2)	107 (30.7)
高位群 (男性：19.5～520；女性：19.5～525)	64 (19.7)	99 (28.4)
プロダクティブな役割数 (レンジ)		
低位群 (0～1点)	81 (24.9)	87 (25.0)
中位群 (2点)	124 (38.2)	104 (29.9)
高位群 (3～6点)	120 (36.9)	157 (45.1)

注1：有償労働、家庭内無償労働、家庭外無償労働のレンジの数値は各群における活動の年換算回数の合計である。

表5 プロダクティブな活動3領域と生活満足度の関連（重回帰分析結果）

	男 性			女 性		
	β	β	β	β	β	β
年齢	-.023	-.024	-.013	-.058	-.070	-.059
家族形態（基準：夫婦のみ）						
独居	-.162**	-.200***	-.164**	-.020	-.012	-.013
その他	.005	-.011	.007	.036	.036	.047
経済的な暮らし向き	.391***	.387***	.387***	.445***	.433***	.426***
IADL	.040	.016	.035	.183***	.180**	.182***
親しい友人・仲間数	.187**	.191**	.182**	.108*	.105*	.108*
集団的活動への参加	-.031	-.029	-.038	.084	.085	.062
有償労働						
低位群 vs 中位群	-.010	—	—	-.041	—	—
低位群 vs 高位群	-.017	—	—	.096*	—	—
家庭内無償労働						
低位群 vs 中位群	—	.053	—	—	.038	—
低位群 vs 高位群	—	.192**	—	—	.052	—
家庭外無償労働						
低位群 vs 中位群	—	—	.041	—	—	.049
低位群 vs 高位群	—	—	.029	—	—	.092
調整済 R ²	.235***	.263***	.236***	.288***	.276***	.282***

*** : $p < .001$, ** : $p < .01$, * : $p < .05$

表6 プロダクティブな活動3領域と日頃の活動満足度の関連（重回帰分析結果）

	男 性			女 性		
	β	β	β	β	β	β
年齢	.012	.011	.022	.006	.021	.041
家族形態（基準：夫婦のみ）						
独居	-.033	-.062	-.044	.044	.064	.051
その他	-.001	-.019	-.006	.069	.060	.088
経済的な暮らし向き	.204***	.201***	.196***	.126**	.130**	.117*
IADL	.002	-.007	.002	.149**	.143**	.140**
親しい友人・仲間数	.289***	.293***	.284***	.291***	.290***	.290***
集団的活動への参加	.238***	.237***	.224***	.342***	.339***	.300***
有償労働						
低位群 vs 中位群	.056	—	—	.000	—	—
低位群 vs 高位群	-.025	—	—	-.091	—	—
家庭内無償労働						
低位群 vs 中位群	—	.038	—	—	-.038	—
低位群 vs 高位群	—	.110	—	—	.035	—
家庭外無償労働						
低位群 vs 中位群	—	—	.065	—	—	.089
低位群 vs 高位群	—	—	.045	—	—	.150**
調整済 R ²	.272***	.276***	.271***	.339***	.335***	.347***

*** : $p < .001$, ** : $p < .01$, * : $p < .05$

表7 男性におけるプロダクティブな活動3領域と主観的健康感の関連(二項ロジスティック回帰分析結果)

	男 性		
	オッズ比 (95% CI)	オッズ比 (95% CI)	オッズ比 (95% CI)
年齢	0.91(0.86 – 0.97)**	0.91(0.86 – 0.97)**	0.91(0.86 – 0.97)**
家族形態 (基準: 夫婦のみ)			
独居	0.91(0.34 – 2.42)	0.70(0.26 – 1.93)	0.88(0.33 – 2.34)
その他	1.09(0.53 – 2.25)	1.07(0.51 – 2.23)	1.08(0.52 – 2.22)
経済的な暮らし向き	1.57(1.01 – 2.43)*	1.60(1.03 – 2.47)*	1.55(1.00 – 2.40)*
IADL	4.21(1.44 – 12.28)**	3.69(1.26 – 10.79)*	4.40(1.51 – 12.85)**
親しい友人・仲間数	1.51(1.14 – 1.99)**	1.55(1.18 – 2.04)**	1.52(1.15 – 2.00)**
集团的活動への参加	0.76(0.36 – 1.59)	0.70(0.33 – 1.48)	0.72(0.34 – 1.51)
有償労働			
低位群 vs 中位群	1.59(0.50 – 5.06)	—	—
低位群 vs 高位群	1.12(0.50 – 2.53)	—	—
家庭内無償労働			
低位群 vs 中位群	—	2.17(0.84 – 5.60)	—
低位群 vs 高位群	—	2.22(1.05 – 4.66)*	—
家庭外無償労働			
低位群 vs 中位群	—	—	1.16(0.53 – 2.56)
低位群 vs 高位群	—	—	1.05(0.44 – 2.53)
モデル χ^2 (df)	38.42(9)***	42.84(9)***	37.88(9)***

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$

CI: 信頼区間

表8 女性におけるプロダクティブな活動3領域と主観的健康感の関連(二項ロジスティック回帰分析結果)

	女 性		
	オッズ比 (95% CI)	オッズ比 (95% CI)	オッズ比 (95% CI)
年齢	0.98(0.92 – 1.04)	0.96(0.91 – 1.03)	0.97(0.91 – 1.03)
家族形態 (基準: 夫婦のみ)			
独居	1.11(0.50 – 2.46)	1.11(0.49 – 2.52)	1.14(0.52 – 2.47)
その他	2.29(1.16 – 4.51)*	2.37(1.20 – 4.65)*	2.53(1.27 – 5.01)**
経済的な暮らし向き	1.74(1.22 – 2.48)**	1.64(1.16 – 2.31)**	1.60(1.13 – 2.26)**
IADL	5.98(1.39 – 25.67)*	6.72(1.49 – 30.41)*	6.18(1.43 – 26.66)*
親しい友人・仲間数	1.23(0.96 – 1.58)	1.22(0.95 – 1.57)	1.23(0.96 – 1.58)
集团的活動への参加	2.66(1.40 – 5.05)**	2.81(1.51 – 5.25)**	2.52(1.32 – 4.81)**
有償労働			
低位群 vs 中位群	1.64(0.45 – 6.01)	—	—
低位群 vs 高位群	4.36(1.50 – 13.11)**	—	—
家庭内無償労働			
低位群 vs 中位群	—	0.88(0.25 – 3.02)	—
低位群 vs 高位群	—	0.92(0.25 – 3.42)	—
家庭外無償労働			
低位群 vs 中位群	—	—	1.29(0.64 – 2.63)
低位群 vs 高位群	—	—	1.68(0.76 – 3.70)
モデル χ^2 (df)	61.04(9)***	51.80(9)***	53.47(9)***

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$

CI: 信頼区間

表9 プロダクティブな役割数と生活満足度または日頃の活動満足度の関連（重回帰分析結果）

	男 性		女 性	
	生活満足度	日頃の活動満足度	生活満足度	日頃の活動満足度
	β	β	β	β
年齢	-.014	.022	-.056	.044
家族形態（基準：夫婦のみ）				
独居	-.160**	-.034	-.009	.060
その他	.002	-.015	.038	.071
経済的な暮らし向き	.388***	.193***	.430***	.128**
IADL	.037	.002	.177**	.139**
親しい友人・仲間数	.182**	.281***	.108*	.290***
集团的活動への参加	-.032	.227***	.070	.307***
プロダクティブな役割数				
低位群 vs 中位群	.009	-.015	.041	-.020
低位群 vs 高位群	.030	.073	.089	.126*
調整済 R^2	.235***	.274***	.280***	.348***

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$

表10 プロダクティブな役割数と主観的健康感の関連（二項ロジスティック回帰分析結果）

	男 性	女 性
	オッズ比 (95% CI)	オッズ比 (95% CI)
年齢	0.91(0.86 – 0.97)**	0.97(0.92 – 1.04)
家族形態（基準：夫婦のみ）		
独居	0.89(0.33 – 2.38)	1.27(0.58 – 2.78)
その他	1.04(0.50 – 2.15)	2.43(1.23 – 4.80)*
経済的な暮らし向き	1.55(1.00 – 2.39)	1.63(1.15 – 2.31)**
IADL	4.25(1.46 – 12.39)**	5.44(1.25 – 23.64)*
親しい友人・仲間数	1.50(1.14 – 1.98)**	1.23(0.96 – 1.58)
集团的活動への参加	0.73(0.35 – 1.53)	2.40(1.26 – 4.55)**
プロダクティブな役割数		
低位群 vs 中位群	1.19(0.55 – 2.58)	1.11(0.54 – 2.27)
低位群 vs 高位群	1.38(0.59 – 3.23)	2.25(1.04 – 4.88)*
調整済 R^2	38.31(9)***	57.06(9)***

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$

CI: 信頼区間

IV. 考察

本研究では、高齢者のプロダクティブな活動3領域およびプロダクティブな役割数とwell-beingの関連を男女別に検討した。

男性の結果を概観すると、家庭内無償労働の高位群が生活満足度および主観的健康感と正の関連があったのみで、有償労働、家庭外無償労働、プロダクティブな役割数のいずれもwell-being指標の3変数との関連がなかった。穴戸は、高齢者の幸福感規定要因の男女差を検討し、男性に対して単に高齢期の生産性や活動性を強調して就労、地域活動、社会貢献活動への参加を呼びかけても、内的欲求充足が得られない可能性があることを指摘している²⁵⁾。また、本研究の男性の分析結果をみると、すべてにおいてコントロール変数として投入した親しい友人・仲間数がwell-being指標の3変数との正の関連を示している。このことと穴戸の指摘をもとに考えると、高齢期の男性は、有償労働や家庭外無償労働に関与したりさまざまなプロダクティブな役割をもったりすることではなく、親しい友人や仲間と活動したり楽しめるような趣味や娯楽などの活動でないと、well-beingが高まらない可能性が考えられる。

一方で、男性の家庭内無償労働がwell-beingを高めていたことは、先行研究でよくみられる結果と異なっていた。家事や庭仕事が幸福感を高めていたとの知見もみられるが²⁶⁾、家庭内無償労働は終わることなく続き周囲から評価されることもあまりないなどにより²⁷⁾、well-beingを高めることはないとの報告が比較的多い¹⁷⁾。家庭内無償労働の高位群の男性は、家庭内のことをいろいろと行うことによって、一定のやりがいを感じていたり日々生きていることを実感していたり、同居家族がいる者はありがたがられたりすることにより、well-beingが高まっているのであろうか。今後、他の地域の男性高齢者を対象とした研究により、本研究と同様の結果が示されるのか、注意深く検討することが必要である。

女性の結果に関して、第1に、有償労働の高位群は生活満足度および主観的健康感が良好であった。男性中心社会のなかで努力して就労に励んできた女性の定年退職は役割喪失によるストレスが大きい可能性があるため、女性の定年退職は男性よりも否定的影響を示すかもしれない²⁸⁾、との指摘がある。女性の継続的な就労が一般的とはいえない時代を生きてきた女性にとって、高齢期においても有償労働に関与できる意義が大きいため、well-beingが良好となった可能性がある¹⁷⁾。大阪調査では、女性の有償労働の高位群と生活満足度および主観的健康感に正の関連がみられており¹⁷⁾、この部分に関しては本研究の結果と一致した。

第2に、家庭外無償労働の高位群の女性は、日頃の活動満足度が高かった。日頃の活動満足度はwell-being指標の3変数のなかで、自由になる時間にやりがいを感じるような活動をしたり有意義に過ごせているかなどをより敏感に把握するものといえる。女性は、家庭外無償労働に対し、そのような満足感を感じていることが推察される。日頃の活動満足度は、日頃の自由になる時間に行いたいと思えるような活動に着目した満足度の測定を目指したものであるため¹⁸⁾、生活していくなかで義務的な要素が強い有償労働および家庭内無償労働と関連しなかったのは、妥当な結果といえよう。

第3に、プロダクティブな役割数が多い女性は、日頃の活動満足度および主観的健康感が良好であった。さまざまな役割をもつことは、ストレスを緩和する重要な資源の入手をもたらすことや名声、情緒的な満足感などがwell-beingを高めるとの指摘がある¹⁴⁾。本研究の分析対象者においては、このようなメカニズムが女性にはたらいっていた可能性が考えられる。プロダクティブな役割数が生活満足度に関連していなかったのは、well-being指標の3変数のなかで生活満足度はこれまでの人生も含めた満足度を測定しているため、現在担っている役割から得られる主観的な効果を把握しにくいことが影響した可能性がある。

プロダクティブな内容の多重な役割を担う者はwell-beingが高まるのかについて、本研究の結果をみると、男性においてそのような結果はみられなかった。一方で、女性においては、プロダクティブな役割数が生活満足度と関連していなかったものの、日頃の活動満足度および主観的健康感との間には正の関連がみられた。よって、女性については、プロダクティブな役割数とwell-beingの関係性において、role enhancementの視座が部分的に支持される結果となったといえる。

本研究と大阪調査の双方において、プロダクティブな活動がwell-beingを高めることに一致した結果は、次のとおりであった。女性の有償労働が生活満足度および主観的健康感を高めること、プロダクティブな役割数が多い女性は主観的健康感を高めることであった。本研究の結果または大阪調査の結果のどちらか一方のみに、プロダクティブな活動とwell-beingとの間に正の関連があったという結果もいくつかみられた。なお、well-being指標のうち、日頃の活動満足度については、本研究で初めて使用しているため大阪調査の結果との比較はできない。

以上のように、本研究では、日頃の活動満足度以外については大阪調査で使用された項目と変数を使用して追試を実施したが、大阪調査の結果との一致は半数程度であった。このことが地域特性の違いからく

るものなのか、その他に大きな要因があるのか、地域の文化や価値観、制度をはじめとする多角的な資料分析などが必要となるために明らかにするのは容易ではないが、まずは地域特性の違いによる影響から慎重に検討することが求められよう。また、今後も他の複数の地域で同様の追試を行い、どのようなプロダクティブな活動がどのようなwell-being指標を高めるのか、各地域での結果を積み重ねていき、比較検討を続けていくことが望まれる。

本研究の限界について、第1に、本研究は横断的な研究であるため、プロダクティブな活動とwell-beingの因果関係について言及することはできない。今後は、因果関係も含めて検討するために縦断的な研究の実施が求められる。第2に、本研究の結果は、千葉縣市川市という限られた地域の高齢者から得たデータに基づいたものであるため、他の地域の高齢者においても同様な結果が得られるとは限らないことに留意する必要がある。第3に、調査の有効回答率が53.9%であったため、半数近くの高齢者からの回答が得られなかったことに留意して、結果を解釈する必要がある。

文献

- 1) 厚生労働統計協会編. 国民の福祉の動向2011/2012. 厚生指標増刊. 2011, 58(10), 厚生労働統計協会, p.123.
- 2) Butler, R. N.; Gleason, H. P. Productive Aging: Enhancing Vitality in Later Life. Springer, 1985.
- 3) Sherraden, M.; Morrow-Howell, N.; Hinterlong, J. et al. "Productive aging: Theoretical choices and directions". Productive Aging: Concepts and Challenges. Morrow-Howell, N.; Hinterlong, J.; Sherraden, M., eds. The Johns Hopkins University Press, 2001, p.260-284.
- 4) Herzog, A. R.; Kahn, R. L.; Morgan, J. N. et al. Age differences in productive activities. Journal of Gerontology: Social Sciences. 1989, 44(4), p.S129-S138.
- 5) Bass, S. A.; Caro, F. G. "Productive aging: A conceptual framework". Productive Aging: Concepts and Challenges. Morrow-Howell, N.; Hinterlong, J.; Sherraden, M., eds. The Johns Hopkins University Press, 2001; p.37-78.
- 6) 岡本秀明. 高齢者のプロダクティブ・アクティビティに関連する要因: 有償労働、家庭内および家庭外無償労働の3領域における男女別の検討. 老年社会科学. 2008, 29(4), p.526-538.
- 7) Caro, F. G.; Bass, S. A.; Chen, Y-P. "Introduction: Achieving a productive aging society". Achieving a Productive Aging Society. Bass, S. A.; Caro, F. G.; Chen, Y-P., eds. Auburn House, 1993, p.3-25.
- 8) Morrow-Howell, N.; Hinterlong, J.; Sherraden, M. et al. "Advancing research on productivity in later life". Productive Aging: Concepts and Challenges. Morrow-Howell, N.; Hinterlong, J.; Sherraden, M., eds. The Johns Hopkins University Press, 2001, p.285-311.
- 9) 小林江里香. "高齢期の社会関係". 朝倉心理学講座15高齢者心理学. 権藤恭之編. 朝倉書店, 2008, p.151-169.
- 10) 柴田博. "サクセスフル・エイジング". 老年学要論: 老いを理解する. 柴田博, 長田久雄, 杉澤秀博編. 建帛社, 2007, p.55-61.
- 11) Rowe, J. W.; Kahn, R. L. Successful aging. The Gerontologist, 1997, 37(4), p.433-440.
- 12) McIntosh, B. R.; Danigelis, N. L. Race, gender, and the relevance of productive activity for elders' affect. Journal of Gerontology: Social Sciences. 1995, 50B(4), p.S229-S239.
- 13) Baker, L. A.; Cahalin, L. P.; Gerst, K. et al. Productive activities and subjective well-being among older adults: The influence of number of activities and time commitment. Social Indicators Research. 2005, 73, p.431-458.
- 14) Hinterlong, J. E.; Morrow-Howell, N.; Rozario, P.A. Productive engagement and late life physical and mental health: Findings from a nationally representative panel study. Research on Aging. 2007, 29(4), p.348-370.
- 15) Sieber, S. D. Toward a theory of role accumulation. American Sociological Review. 1974, 39, p.567-578.
- 16) Adelman, P. K. Multiple roles and psychological well-being in a national sample of older adults. Journal of Gerontology: Social Sciences. 1994, 49(6), p.S277-S285.
- 17) 岡本秀明. 地域高齢者のプロダクティブな活動への関与とwell-beingの関連. 日本公衆衛生雑誌. 2009, 56(10), p.713-723.
- 18) 岡本秀明. 高齢者の活動に着目した日頃の活動満足度尺度の作成. 社会福祉学. 2009, 50(2), p.45-55.
- 19) Danigelis, N. L.; McIntosh, B.R. Resources and the productive activity of elders: Race and gender as contexts. Journal of Gerontology: Social Sciences. 1993, 48(4), p.S192-S203.
- 20) 杉原陽子. "高齢者の社会的貢献の実態、精神面への効果、および関連要因の検討". 短期プロジェクト研究報告書 後期高齢期における健康・家族・経済のダイナミクス. 東京都老人総合研究所編. 東京都老人総合研究所, 2002, p.57-69.
- 21) 古谷野亘, 長田久雄. 実証研究の手引き: 調査と実験の進め方・まとめ方. ワールドプランニング, 1992, p.28-31.
- 22) 古谷野亘, 柴田博, 芳賀博ほか. 生活満足度尺度の構造: 因子構造の不変性. 老年社会科学. 1990, 12, p.102-116.
- 23) 古谷野亘. QOLなどを測定するための測度 (2). 老年精神医学雑誌. 1996, 7(4), p.431-441.

- 24) 艾斌, 星旦二. 高齢者における主観的健康感の有用性に関する研究: 日本と中国における研究を中心に. 日本公衆衛生雑誌. 2005, 52(10), p.841-852.
- 25) 宍戸邦章. 高齢期における幸福感規定要因の男女差について: JGSS-2000/2001統合データに基づく検討. 日本版General Social Surveys研究論文集. 2007, 6, p.45-56.
- 26) Menec, V. H. The relation between everyday activities and successful aging: A 6-year longitudinal study. Journal of Gerontology: Social Sciences. 2003, 58B(2), p.S74-S82.
- 27) Glass, J. ; Fujimoto, T. Housework, paid work, and depression among husbands and wives. Journal of Health and Social Behavior. 1994, 35(2), p.179-191.
- 28) 杉澤秀博, 柴田博. 職業からの引退への適応: 定年退職に着目して. 生きがい研究. 2006, 12, p.73-96.

岡本 秀明 (和洋女子大学生活科学系准教授)

(2013年10月15日受付)